

早いものでもう期末試験が始まりました。宗教の授業は3回しかできていないのに、です。3学期は短いので仕方ありません。来年の今頃は多くの人がすでに大学の入学試験などで日本中を駆け回っていることでしょう。

さて、高校のカリキュラムには、様々な科目が組み込まれていて、そのおかげで期末テストにも多くの科目があります。これが大学に行けば、その数倍にも上る科目にお目にかかることになります。そもそも、そういった学問を区別したのはいつ、誰がしたのでしょうか。学問とは何かを定義し、体系的に学問を分類した最初の人にはアリストテレスのようです。もちろん、あのことは今ほどたくさんの学問はありませんでした。しかし、アリストテレスの学問の定義と分類には今でも役に立つことがあると思いますので、ちょっと紹介したいと思います。

彼は、「学問とは何か」と問うて、まずそれと「似て非なるもの」を挙げます。それは経験で得る知識です。経験による知識とは、たとえば村のおじいさんが「しめっばい風が西から吹いとるから、明日は雨じゃ」とかいうものです。学問の知識と違うところは、なぜそうなるか（原因）を説明しないところです。以前いいましたように、学問の一つの定義は「原因についての確かな知識」です。テレビの天気予報の番組に出てくる天気予報士の人には「明日は九州の南海上に低気圧ができて、西風が吹き、・・・ので雨になる」というふうに説明します。それは理路整然とした説明ですよ。村のおじいさんも天気予報士に負けないくらい正確に天気を予測できるかも知れませんが、ただ、なぜそうなるかを知らないのです。ちょうど私が、車のメカニズムを知らずに、何の問題もなく運転をしているのと似ています。ただ、原因を知らないので、何か事故があったときは途方に暮れるしかありません。

それではアリストテレスはどのように学問を分類したのでしょうか。彼は学問を「理論の学」と「実践の学」に二分します。また学問をする前の予備の学問として「論理学」を挙げています。「論理学」は正しく推理を進めていくための規則を学ぶものだからです。ちょっと「英語」や「国語」に似ています。それをしっかり習っておかないと本も読めないし、文章も書けないし、発表もできないので、まず言葉に関する科目を勉強するのと同じです。

「理論の学」とは、要するに世界がどうなっているのかを知る学問で、「実践の学」とは人はどう行うべきか（どう生きるべきか）を探求する学問です。「理論の学」は、その対象に従って、「自然学（第二哲学と呼ばれる）」、「数学」、「形而上学（第一哲学、または神学とも呼ばれる）」の三つに分けられる。「実践の学」とは、人はどういうもので、どう生きるべきかを探求する「倫理学」と、そういう生活ができるためにはどういう国を作らねばならないかを調べる「政治学」に分かれます。

では、アリストテレスは、いったいどういうことを見て、学問を分けたのでしょうか。それは、「何を研究するか」と「どんな視点で研究するか」の二点です。たとえば、医学は人間を研究しますが、社会学も人間を研究します。つまり、対象は同じです。しかし、医学は「健康と病気という視点から」、社会学は「人間が構成する社会という視点から」研究を進めるという点で、両者は異なるのです。これでいくと、「何を」を見ると、「自然学」は「物質を持つもの」を、「数学」は「量と数」を、「形而上学」は「すべての存在」を対象とする、となります。

次に、アリストテレスは、学問が異なればそれぞれ独自の方法を用いなければならないと言いました。それに対して、前回お話ししたデカルトは「数学の方法で哲学をしたら、哲学も数学のような明晰な学問になるぞんす」と言って、新しい哲学の方法を提唱しました。そしてこれが成功したと見ると、あらゆる学問に通じる唯一の方法を探し当てるといふ冒険を始めました。かくてデカルトは、物理学、生物

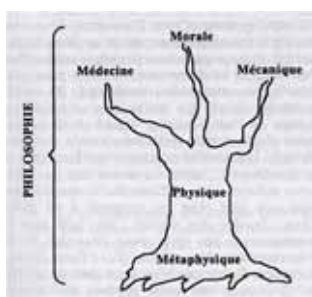
学を制覇し(たと思い込み)、医学にまで同じ数学的方法を当てはめ、「确实無謬(間違いのない)の論証に基づく医学」を打ち立てようと試みたのです。しかし、彼の生存中にこれらの誤りが明るみに出ました。デカルトは、血液の循環を発見したウィリアム・ハーヴェイという人に、「あんたの血液循環の説には大賛成だが、心臓運動の記述については、数学的ではないので、おかしいぞ」と異論を述べたのです。つまり、「血液循環を発見していないデカルトが、血液循環の発見者であるハーヴェイに、この現象を説明し、説明するたびに誤りを積み重ねていく」という世にも不思議な光景が繰り広げられたそうです(ジルソン、『理性の思想史』、175頁)。

すべてを数学的に説明できると信じたのは、デカルトが数学の天才だったからでしょう。(ただし、デカルトに数学のすばらしさを高校で教えた先生(イエズス会のクラヴィウス神父)の影響が大きかったようです)。普通の凡才にはこんな考えは浮かびません。でも天才に恵まれた人が、自分の天才におぼれて非常識な誤りを犯すことは珍しくないようです。それは自己の才能にほれぼれして、自信過剰になるからでしょう。私たちとしては、異なる学問には、それぞれ独自の方法で研究しないといけないという健全な常識を信頼して、数学と英語と社会と理科は別々の仕方勉強しましょう。

アリストテレスが学問について言っていることで、もう一つ注目すべきは、「実践の学」は人間の行いや社会現象を扱うので、理論の学のごとき正確な答えを求めべきではなく、大ざっぱな把握で満足せねばならないと言っていることです。そうして、実践の学にも数学のような正確性を求める人は「教養のない人だ」と切り捨てています(『ニコマコス倫理学』、1巻、3章)。19世紀になって、人間の善と悪は何かと問うて、人間の善を快樂と、悪を苦痛と考え、その快樂と苦痛を数値で表そうとした人(こうして最大多数の最大幸福を数字で算出しようとした。功利主義者のベンサム)が出ました。この人なぞが、この「教養のない人」なのでしょうか。求めるべき正確さが学問によって違うことは、国語の問題では、数学や物理のような正確な答えが求められないのと似ているでしょう。

もちろん、学問の区別をあまりに厳しくするのは間違いでしょう。なにせこの世の現実には色んな部分にはっきりと分けられるようなものではないのですから。最近では異なる学問を結びつけようとする傾向があります。国と国との関係を国際というように、学問と学問の関係を表す「学際」という言葉が出始めています。立命館の文学部には「学際プログラム」といってコースがありました。松岡正剛という人が学際的な勉強で有名です。

最後に、ピタゴラス教団は「魂の清め(カタルシス)」のために学問の研究をしていたと言いましたが、これは実は西洋の古代から中世、ルネッサンスの時期までの考え方でした。日本や中国でも似たような態度があった。孔子も「朝に道を知れば、夕べに死すとも可なり」と言っていますよね。皆さんも、単に試験でよい成績を取るため、よい仕事にありつけるため、何かの賞を獲得するためではなく、人類の偉大な思想家になって、「人間としての完成」も目指して勉強するように心がけてください。そのためにまずしっかり勉強することが前提条件ですが。



デカルトはすべての学問が木のように構成されていると考えたそうです。左の絵には、根っこには Metapysique (形而上学:あるいは第一哲学)、幹は Physique (自然学、あるいは第二哲学)があって、その上に「医学」、「倫理学」、「工学」が見えます。